
酒をあおる男～小さな星の上で～

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酒をあおる男／小さな星の上で／

【Nコード】

N6530E

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

酒をあおりつづける赤ら顔の男と、旅をつづける少年。決して交わることのない二人の言葉と、すぐに忘れてしまうような一瞬の出会い。

ひたすら酒を呑んでいた
味を忘れて酔いに任せ
ひたすら酒を呑んでいた

傾ける瓶はすぐに空になる
酔いつぶれるまでは遠く
曖昧な脳裏は霞んだまま

それでも酒を呑んでいた
旨くもない酩酊感に笑う
赤ら顔の自分は

何気無く上げた視線の先
宇宙に浮いた少年の形の白に
壊れゆく自己を想う

“ 何をしてるの？ ”

やわらかな声が耳に痛い
幻聴ならば何故こんな声が
誤魔化すように酒をあおる

“ 呑んでるんだ ”

会話の方法など知らないまま
この幻を消したい一心で
ぶっきらぼくに言葉を紡いだ

“ どうして、呑んでるの？ ”

どうして？

言葉が頭をめぐる

うかぶ答えに体が震えた

“ 恥ずかしいからだ ”

ああそうか、と頭が言った
るれつの回らない自分にさえ
顔が燃えてしまいそうだった

“ どうして、恥ずかしいの？ ”

顔を上げて 白を見る
澄みきった瞳の深さに
眩暈すら覚えて酒をあおる

“ 呑んでるからだ ”

ぶつきらぼくに呟いて
それきり 顔を上げずにいた
上げることなど出来なかった

目を覚ませば 夜明けが見えた
誰もいない星の上
ころがる自分と酒の空き瓶

ため息の合間に 酒をあおる
それでも消せない記憶に
吐気を堪えて笑う

誰もいない虚空に 白の面影を視
息をついて酒をあおる
消えない記憶がただ 忌々しい

“ どうして、呑んでるの？ ”
“ 恥ずかしいからだ ”
蘇る言葉すら 忌々しい

遠く始まる朝の光が
空き瓶の山を照らして白く
それでも吐気は止まらずに

赤ら顔を隠せるように下を向く

醜さにこみあげる吐気を

酒の酔いで誤魔化しながら

ひたすら酒を呑んでいた

味を忘れて酔いに任せ

ひたすら酒を呑んでいた

（後書き）

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。

水音灯です。

あなたがそこに居てくださることが嬉しいです。

この作品を読んでくださって、ありがとうございます。

ご感想・ご批評、誤字・脱字のご指摘などいただけると嬉しいです。
どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530e/>

酒をあおる男～小さな星の上で～

2010年10月12日02時57分発行